



若 鳩



【校訓】 自立・貢献・感動 【教育目標】 知る 考える 行動する

自分の中でのトップを目指す2学期に

連日猛暑で心配ですが、2学期が始まりました。3年間の改修工事の最終年度となり、体育館は工事中ですが、全ての教室と玄関がリニューアルしました。生活しやすくなった学習環境の中で、7月の学校評価や全国学力調査の結果を踏まえ、学力向上、自己決定力や自己指導能力向上のために、力を尽くしていきます。

始業式では、4月に話した「挑戦と努力」を継続して「自分の中でのトップを目指すこと」、「The sky is the limit.」というお話をしました。様々なことにじっくり取り組める2学期だからこそ、挑戦し、よさや可能性などさらに力を伸ばしてほしいと思っています。

【全国学力調査の結果】

7月14日に全国学力調査結果が出ました。個人票に関しては、1学期中に配付しています。

国語、数学に関しては、全国・都平均よりも高かったですが、理科は低い結果となりました。無解答率は昨年度よりも減少傾向にありますが、読み解く力と表現力に課題が見られます。表やグラフ等から読み取り、根拠や理由をもとに論理的に考え、表現する力の育成が必要です。教科によっては、その教科の用語を使いながらまとめる力の育成が必要です。すべての教科で、授業や単元ごとの振り返り等で、相手意識をもって身に付いた内容について書く、他の生徒に口頭で説明するなどの場面を設定し、継続的に指導をしていきます。

また、板橋区授業スタンダードSに取り組むことで自己決定力や自己調整力も身に付いてきます。クロームブックを活用しながら授業改善を行っていきます。また、学校外での学習量が多い、ゲーム等の使用時間が少ないほど学力定着に繋がっていますので、家庭学習の習慣を身に付けるようにご指導をお願いいたします。

国語

(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項

A 話すこと・聞くこと

B 書くこと

C 読むこと

知識・技能

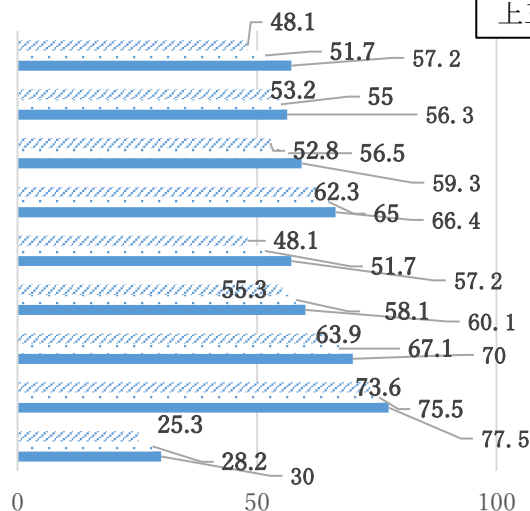
思考・判断・表現

選択式

短答式

記述式

無解答
10%以上
記述式
4問中2問
短答式
2問中1問



平均正答率

上三 60 都 57 国 54.3

国
都
三
上

【課題】

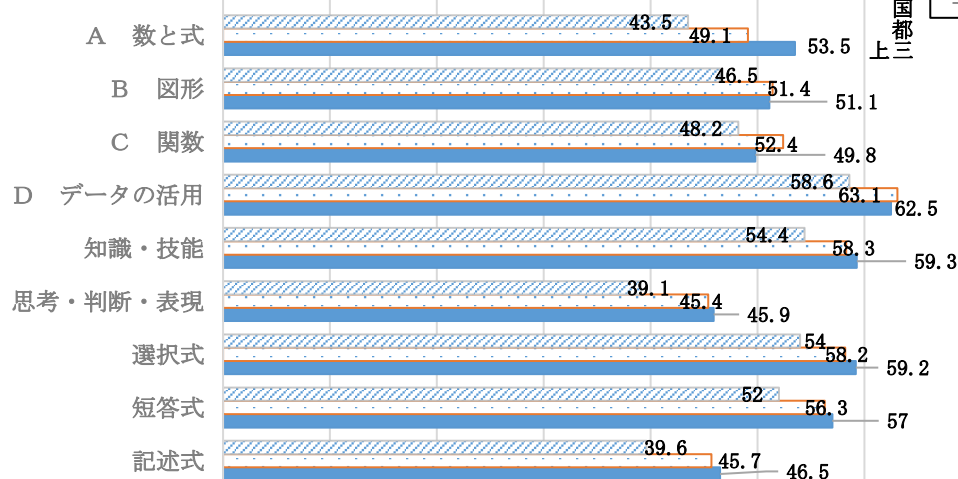
今回の調査において本校は、全国平均、東京都平均を僅かに上回る結果となった。特に知識・技能の定着を図る問題の平均点は高かったが、資料やICT機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することが問われる選択式の問題の正答率は3割ほどでした。また、自分の考えとそのように考えた理由を問われる記述式の問題も3割ほどの正答率であり、無解答者も他の問題と比較して多かったことが課題である。ICTを活用する機会と、自分の考えの根拠や理由を共有する機会が少ないことが原因であると考えられる。

【今後の取組】

「なぜこのように考えたのか」、「文や資料などのどの部分を読んでそう感じたのか」などをペアやグループで共有し、全体で発表する場面を一単元に最低一度は設定する。その際、ICT機器を活用することで、何を伝えたいのか、それにはどの資料が必要なのか、見やすい資料にするにはどう工夫すれば良いかなどを自分のペースで考えられるようにし、資料やICT機器などを活用して表現を工夫しながら、自分の考えを根拠や理由をもとに、正確に言葉で伝える力を確実に伸ばしていきたい。

また、「自分の意見が書けない」状態を「何かは必ず書く」という状態にするために、書くときのヒントやキーワードを提示したり、書き始めと書き終わりを伝えて考えやすくするなど、できるようになるまでのスモールステップを用意したり、少しでも自信をつけ、表現力を身に付けさせていく。

数学



平均正答率
上三 54 都 53 国 48.3

無解答
10%以上
記述式
5 問中 3 問
短答式
5 問中 0 問

【課題】

今回の調査では平均正答率が 54%と都平均を僅かに上回り、一定の成果は確認できた。しかし、正答数分布を分析すると上位層と下位層の差が大きく、学力の二極化が進んでいることが明らかになった。特に、5 問以下の正答しかできなかった生徒が全体の 4 分の 1 を占めており、基礎的な知識・技能が十分に定着していない層が一定数存在している。また、思考力や表現力を問う問題において正答率が低く、自分の考えを数式や図、文章を用いて表現する力が不十分であることも課題である。授業の中で答えを求めることに重点が置かれ、過程や理由を説明する活動が十分に行われていないことが影響していると考えられる。基礎学力の不足と論理的表現力の不足という二つの側面が、現状の大きな課題である。

【今後の取組】

今後はまず、基礎的な知識・技能を確実に身に付けさせるために、短時間の小テストや確認プリントを活用し、反復的に学習できる仕組みを整える。その上で、授業内では単に答えを出すだけでなく「どのように考えたか」「なぜその方法を選んだのか」を説明させる場面を多く設け、思考過程の可視化を習慣化していく。また、ペアやグループでの相互説明や発表活動を取り入れ、生徒同士が考えを共有し合うことで表現力を高めることを目指す。さらに、習熟度に応じた補充学習や発展課題を設定し、下位層の底上げと上位層のさらなる伸長を両立させる。こうした取り組みを通じて、学力差の縮小とともに、生徒一人一人が自信をもって学びに向かえる環境を整えていきたい。

理科

	平均 IRT スコア	標準偏差
本校	467	95.9
東京都	506	117.9
全国	503	124

(理科は CBT で実施し、IRT (項目反応理論) に基づき算出したスコア)

【課題】

今回初めて CBT 調査が導入された理科では、タブレットで解答するだけでなく、問題に実験の様子や微生物の顕微鏡動画などを視聴して答える問題があった。これらでは、覚えた知識をそのまま答えるのではなく、知識を活用して解く「思考・判断・表現」の力を問われた。身近な生活から見いだした課題を、学習した知識を用いて問題解決する思考力、また、考えついたアイデアを他者に伝える表現力が課題である。

【今後の取組】

授業で扱った科学的学習内容が、身近にある自然現象に関連付けられていることを重視し、学習内容の有用性を感じさせるとともに、将来の仕事や生活に役に立つ内容として、知識を活用することができるよう工夫する。

科学的事象の理解のために、授業では電子黒板を用いて、図表や動画の提示を行う。また、タブレットを用いて、実験結果の共有や、まとめ・考察を行ったり、課題の提出を行ったりし、学習の定着を図るようにする。

ワーク・A I ドリル (すらら) を活用し、学習内容を繰り返し学習し、様々な問題に触れることで、基礎的学習内容の定着を図る。